

令和7年度「全国学力・学習状況調査」の結果 －分析から見てきた成果・課題と今後の取組について－

区 名	淀川区
学 校 名	加島小学校
学校長名	米倉 正義

文部科学省による「全国学力・学習状況調査」について、令和7年4月17日（木）に、6年生を対象として、「教科（国語・算数・理科）に関する調査」と「児童質問調査」を実施いたしました。

大阪市教育委員会では、保護者や地域の皆様等に説明責任を果たすとともに、より一層教育に関心をお持ちいただき、教育活動にご協力いただくため、各学校が調査結果や調査結果から明らかになった現状等について公表するものとしています。

本校でも、調査結果の分析を行い、これまでの成果や今後取り組むべき課題について明らかにしてまいりましたので、本市教育委員会の方針に則り公表いたします。

なお、本調査により測定できるのは、学力の特定の一部であり、学校における教育活動の一側面に過ぎません。

1 調査の目的

義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図るとともに、学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。さらに、そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

2 調査内容

(1) 教科に関する調査

- ・国語
- ・算数
- ・理科

(2) 質問調査

- ・児童に対する調査
- ・学校に対する調査

3 調査の対象

- ・国・公・私立学校の小学校第6学年の原則として全児童
- ・加島小学校では、第6学年 87名

令和7年度「全国学力・学習状況調査」結果の概要

国語科・算数科・理科ともに、平均正答率は全国平均を下回った。対全国比は、国語科が0.87で、昨年度より改善が見られた。算数科は0.86で、昨年度を下回る結果となった。3年ぶりに実施となった理科は、対全国比が0.81となった。また、平均無解答率では、国語科が5.4%、算数科7.6%で全国平均より高くなっており、対全国差は昨年度より開いた。

児童を4つの区分で分けると、「学力に課題の見られる児童の割合」(区分Ⅳ)は、昨年度より、国語科で7.8ポイント、算数科で3.5ポイント減少し、改善が見られた。一方で、「正答率の最も高い児童の割合」(区分Ⅰ)は、国語科で13.8%、算数科9.2%と、本校の昨年度(国語15.4%、算数24.2%)や、全国平均(国語27.7%、算数25.3%)と比べてかなり低かった。

分析から見えてきた成果・課題

教科に関する調査より

〔国語〕「情報の扱い方」「我が国の言語文化」に関する事項において、平均正答率が全国平均を上回り、漢字検定受験等の成果が見られた。一方、「話す」「聞く」「書く」「読む」の平均正答率は、全国平均から10ポイント以上の差がついており、資料等から必要な情報を読み取り、自分の考えが伝わるように工夫したり、まとめたりすることに課題が見られた。

〔算数〕すべての領域で、正答率が全国平均を下回り、特に「測定」の正答率が最も低かった。また、「知識・技能」よりも「思考・判断・表現」に関する問題の方が、全国平均との差が大きく、「選択式、短答式、記述式」の中では、記述式の正答率が最も低かった。基本的な計算力が定着しておらず、応用的・発展的な問題に対応できていない課題が見られた。

〔理科〕「エネルギー」「地球」「粒子」を柱とする領域が全国平均と差が大きく、「生命」を柱とする領域は比較的正答率が高かった。また、「解決したい問題を見出すことや、学習を通して得た知識を活用して理解を深めたかどうかを問う問題」や、「自分の考えを適切に表現する力を問う問題」において大きな課題が見られた。

質問調査より

「毎日、同じくらいの時刻に寝ていますか」と「毎日、同じくらいの時刻に起きていますか」の質問に「している」と回答した児童の割合は、全国平均と比べ大きく下回った。

「自分には、よいところがあると思いますか」「学校に行くのは楽しいと思いますか」「普段の生活の中で、幸せな気持ちになることはどれくらいありますか」「いじめは、どんな理由があってもいけないことだと思いますか」の質問に肯定的な意見を回答した児童の割合は、全国平均と比べやや低かった。一方、「先生はあなたの良いところを認めてくれますか」「人の役に立つ人間になりたいと思っていますか」では、全国平均を上回った。

「学校の授業時間以外に、平日、1日当たりどれくらいの時間、勉強をしますか」の質問に「2時間以上」と回答した児童の割合は、全国平均を12.1ポイントと大きく上回っている反面、「30分より少ない」「全くしない」と回答した児童の割合は、全国平均を10.6ポイント下回り、二極化しているのが分かった。

読書関連の質問においては、「読書は好きですか」の質問に、肯定的な回答をした児童の割合は、全国平均を約10ポイント下回り、読書習慣に課題が見られた。

今後の取組(アクションプラン)

本校では、学力に課題の見られる児童の割合が多いことから、学力の時間(さみどりタイム)・漢字検定・こども新聞を使用した要約の家庭学習などに取り組み、主に国語科で学力の底上げを図ってきた。今年度の全国学力・学習状況調査では、国語の「言葉の特徴」(漢字)・「情報の使い方」での平均正答率が大きく向上しており、取り組みの成果が顕著に表れた。一方で、「話す聞く」「書く」「読む」は、大きな変化はなかった。今後、合理的配慮や「個別最適な学び」を授業の中で保障することを通して、向上を図っていく。

算数は、昨年度までと大きな変化はなかった。これまでは、習熟度別学習をベースに学力向上に取り組んできたが、効果については検証が必要である。算数は、定着していない学習内容があると、発展的な学習は理解できない。今後は、個別に必要な学習内容を振り返り、学び直しをすることで、自分の成長を感じられるような授業づくりや取り組みを検討していく。

また、児童の自己肯定感を高めるために、児童のがんばりを積極的に評価し、児童が達成感を安心感を感じられるような環境づくりを進めていく。さらに、児童が安定して学びに取り組めるよう、保護者に生活リズムや家庭学習の環境の調整についての協力を願い、学校・家庭での両輪で児童をサポートしていく。